

編集室から

毎号、前年同月の写真の中から表紙の写真を選んでいるのですが、弥生・三月は、一年を通じて最も忙しい年度末ということもあってか、使えそうな写真が無く、今回は、4年前のフォルダまで遡りました。

写真として記録保存しておく、その頃にしたこと、尋ねた地域・人とともに、当時交わした言葉や想いも一緒になって思い起こされます。わずか4年前ですが、こんなにも遠く感じるのか...と、感じてしまうのは、その間の変化があまりにも大きかったからでしょうか。

2月になって、思わぬ地域で豪雪となりました。被災された方々・地域の皆様に心からお見舞い申し上げます。雨が集中的に振り続けるゲリラ豪雨が、冬季に起これば当然ゲリラ豪雪になります。その事を今回、思い知らされた感があります。気候変動の原因的には、温暖化ですが、現象的にはそのような温和なものではなく、「劇症化している」ことに今月ご寄稿の井垣先生ご指摘のように「どれだけ深刻に自覚できるのか」が、個人にとっても社会にとっても、今後益々重要になっていくようです。

一方で、サピエンス全史に拠ると、常に前向きな妄想を描く本能こそが我々の正体であるようですので、このまま本質的変革無く自滅への道を猪突猛進し続けるのかもしれない。

生態系の破壊は、何も現代に始まったものではなく、ヒトが大陸を越えて全地球に進出したときから連綿と起こされ続けている史実を前に、自分たちがやっていることの大局的な視点が欠落しているが故に、脳天気でいられるヒトという存在の危うさを感じざるを得ません。

梅が咲き、桜が咲こうとしています。やがて木々も芽吹き始めます。光景は、そうであっても「ほんとうに賢いこと」とは何か?考えさせられる日々です。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3

ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術
者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、
計画マンがどのようなことを考えているのか
などに触れて、少しでも業界を知っていただ
ければと考えて編集しています。

2017/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2017/03

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

弥 生



お江戸：池上梅園にて
by hama

寄稿 『体と心 の生活習慣病』その四

麻田総合病院・糖尿病センター 井垣 俊郎

前回までは、糖尿病をはじめとする生活習慣病が増えていること、生活習慣病によって長く患う人生になってしまうこと、そしてそれを防ぐには薬による治療だけでは不十分で、生活習慣そのものを正す必要がある、という話をしてきました。

では、医療がそうしたニーズに応えるような貢献をしてきたといえるでしょうか。残念ながら、胸を張るには程遠いと言わざるを得ません。「3時間待ちの3分診療」とか「葉漬け」などと言われて久しいですが、こと予防医学に関しては本質的に何も変わっていないのが現実です。私も糖尿病専門医という肩書きを持ちながら、これではダメだと思いつつも、押し寄せる患者さんたちを捌くのが精一杯で、なぜ体重が増えているのかを問うこともなく検査値を正すための処方を出し続ける毎日でした。私なりに志を持ち、夢と希望を抱いて歩み始めた糖尿病診療でしたが、経験を重ねるにつれて広がっていくギャップに糖尿病診療が嫌いになりました。そんな時、今から十年ほど前ですが、立て続けに二つの出来事がありました。いや、起きてくれたというべきでしょう。一つ目は、映画『不都合な真実』との出会いでした。

理系の人間ですから、環境問題には多少の関心は持っていましたし、地球温暖化が目新しかったわけではありません。私が驚いたのは、地球温暖化で起き

ていることが生活習慣病として私たちの体の中で起きていることとピタリ重なったからです。大気中の二酸化炭素濃度と気温がゆるやかに上昇を続け、氷河が後退してゆく。これは検診の血液検査や体脂肪率の異常と同じで、無視したり先送りしたりしても当面はなんとありません。しかし北極海の氷がなくなると鏡の役割を果たすものがなくなり、太陽光線が直接海水を温めだした時に何が起きるのか。それは、血管が詰まって臓器への血流が途絶えるまで何もしない、というのとほぼ同じことです。

そして私が最も危機感を抱いたのは、生活習慣病の方がはるかに我が身に切羽詰まったことであるし差し迫る危機をより直接的にイメージできる（身近に脳梗塞や心筋梗塞や認知症の人はいませんか？）はずなのに、放置している人がかくも多いという現状です。ならば地球温暖化など防げるわけがないではないか、我々の子供達に我々は何を残してしまうのか、と暗澹たる気持ちになりました。私に何か出来ないのか。私の培ってきた知識や経験が活かせることは何かないのか。こんな自問自答（そのささやかな答えの一つが、この投稿です）を真剣に始める契機になった出来事でした。



【プロフィール】

（いがき としお）金沢大学北浜寮で、濱さんの2年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。



濱のつぶやき 『賢い人（二）』

サピエンス全史上下巻通読の前号コラムに続く。サピエンスが、他の人類と異なっていたのは、唯一「妄想力・想像力」だったという。

創造は想像を超えない。イメージされたうちの一部分だけが実際に創造・製造される。車・スマホに限らず、遍く我々が今手にしているものはすべて、最初は誰かの頭の中に想像されたものばかりだ。新しい創造を産み出す想像力こそサピエンスにだけ備わった能力であり、その拡大がニンゲンの営みを変え続け、今日に至る歴史を織り成しているという。一方で、さらになる想像力の拡大・暴走は生物としてのニンゲンの存在をも危うくする高確度な危険性を孕んでいる。

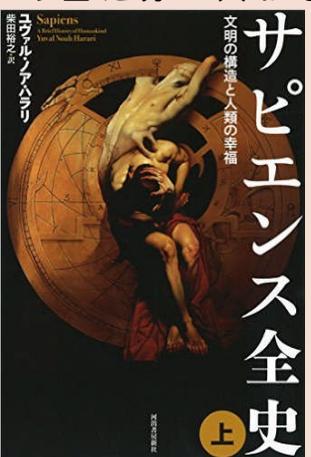
肉体は、動植物を食べ、それらをエネルギーに変換して動き、働いている。では、精神力・想像力はどうか。集中するにもエネルギーが要る。並外れた精神力・想像力は何処から生まれ、何を糧としてエネルギーに変換して作用しているのか。歴史学者でありながら、膨大な知識量を背景に、微細な事実と長大な史観を共に綾なせる著者といえども、その問いには答えていない。

科学の世界が未だ解明できていない「意識」の世界

は、「我思う。故に在る」ものの、物理的には存在証明ができない。想像力がサピエンス固有の能力であるならば、創造の源泉たる意識もまた我々に備わっている「存在」であるはずだ。では、我々が創造してしまったが故に、自身を滅ぼした後、肉体は消滅することは必定だが、意識・精神はどうなるのか。肉体にとつてのエネルギーは食べなければ、生成できない。が、精神にとつてのエネルギーは、何を以って生成され消費されていくのか…。その答えに拠っては肉体なくとも精神は何かしかのエネルギーを食べながら生きながらえて往くのかも知れない…。であればこそ、それはまさに「我々の存在の証明」問題なのではないか。

下巻の最後は、こんな言葉で締めくくられている。

「私たちが直面している真の疑問は、『私たちは何になりたいのか?』ではなく、『私たちは何を望みたいのか?』かもしれない。この疑問に思わず頭を抱えない人は、おそろくまだ、それについて十分考えていないのだろつ。』…なんと空怖ろしい表現であるろつか。」



大規模プロジェクトの費用便益分析（便益Benefit/費用Cost=B/C）は、当該事業の可否を判断するにあたって、大変重要なポイントである。鉄道建設においては、総費用Cと開業後50年間合計の総便益Bを算出するケースが多い。そして、基本的にB/C 1を満たさない限り、その事業は前に進めない。

ここで問題となるのが、
「将来生じる便益や費用を現在の価値でどう評価するか」
である。

例えば、今年得られる10万円と10年後に得られる10万円を足して、総便益20万円とはならないのである。一般的に、年4%の割合で将来価値を現在価値に割り引く手法がよく用いられている。既にご承知の読者が多いと思うが、この年4%を社会的割引率という。その結果、“10年後の10万円”は、“現在の約6.8万円”に換算され、総便益は約16.8万円となる。

「明日の百より今日の五十」
という諺は、極端ではあるが社会的割引率を単純化したものと言える。

B/Cの上下に、この社会的割引率がかなり効いてくる。ただし、Cのうち大きな割合を占める建設費は、比較的近い将来に支出されるものであり、Bと比べて割り引く影響は小さい。それに対してBは常に建設費の後に生じ、例えば50年後の10万円は現在の約1.4万円になってしまうなど、Cと比べて割り引く影響が大きい。

つまりは、1つの事業についての2つの具体案を比較する場合、完成時期が極めて決定的な要素となる。まさに

「タイムイズマネー」
の世界である。さらに人口減少社会においては、完成が後ろにずれればずれるほど需要減の影響を大きく受け、社会的割引率を適用する前のB自体が小さくなる可能性がある。

北陸新幹線の敦賀以西ルートを比較する場合においても、上述のような社会的割引率を用いた費用対効果分析が行われている。算出結果のみを見るのではなく、分析の前提となる建設期間の設定を押さえておくことが必要である。事業評価のシミュレーション上の問題だけではなく、本質的な意味においても、早く着工し短期間の工期で開業することが、便益を最大化する上で極めて重要なことは言うまでもない。

経営管理をしているお店も入れると現在4店舗の飲食店を経営しております。能登の郷土料理屋、信州蕎麦屋、寿司居酒屋、日本酒バーと業態も様々です。飲食業をはじめ約6年。延べで20人以上の料理人を採用し、ともに働いてきたわけですが、これがまた一般的な会社(今までいたビジネス社会)の人間とは比較にならないほど個性的な人間が多いのです。決して全員ではありません。“個性的”というより“変わっている”と言ったほうがいいでしょうか(笑)。勤務時間も長く、スキルの習得に時間がかかり、かつ厳しい師弟関係も未だ存在する料理の世界に身を投じる若い人たちが減っているようです。そんな世界で一際個性を発揮する人間味あふれる料理人たちを2回に渡ってご紹介したいと思います。

一人目は寿司職人のTさんです。彼はいわゆる流れの板前さんで、調理師会という調理人の派遣組織から3か月限定で働いてくれた方です。忘れられないエピソードとしては、2011年3月11日の東日本大震災の瞬間も板場で魚の仕込みをしていたのですがビル管理の方が「危ないからビルの外に出たほうがいい」と呼びに来たにも関わらず『ここで死ねるなら本望ですから』と板場から動かなかったようです。後日それを聞いた私は「会社としての責任問題があるから、きちんと指示に従うように」と諭したところ死生観の話になり深夜まで飲み明かした事がありました。一匹狼的な立ち振る舞いをしていましたが、熱く語っている彼を見て「あーこの人、本当は人と話すことが好きで、本気で料理人の生き方というのを伝えていきたいんだな」と思いました。料理の世界で師匠からの「板前とはこうあるべき」という教えを守り通す実直な男です。

二人目は和食板前のY君です。彼は友人からの紹介でうちの会社で採用したのですが、最初会った時の印象は「ホストしてた？」でした。長めの金髪に、ピアス。そして一緒に働いてみたら背中にタトゥー(所謂刺青ではありません)。大丈夫?と試してみたいのですが、これまた腕がいい。魚のを捌かせたら一番の腕前です。刺身の切り口が鮮やかで「刺身が立つ」とは正にこれの事だと感服しました。その彼もうちに入って3年位したころに「社長どうしても自分の店が持ちたい」と言われ巣立っていきました。彼は無事昨年の7月に渋谷で自分の店を構えました。それもヘアスタイルは丸刈りで。「気合入れました」と言っていたが、自分の店を持つ、自分が経営をするという立場になると気持ちはもちろん、見た目も変わってくるようです(笑)。

次回にもまた一般的な会社社会では会えないような面白い料理人達をご紹介したいと思います。

『富士の国から ~大魔神のたび~』ドバイへの旅 2016.12.23~28
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

ドーハと言えば、1993年のW杯最終予選で日本初の本戦進出を断たれたドーハの悲劇がすぐ浮かぶ。時のキーパー松永成成は浜松の我が家の近所で三人兄弟の末っ子、長男は小生と同級だ。

話をもとに戻す。乗り継ぎに2時間半ほどある。ラウンジに入ろうとするとファーストクラスラウンジを案内された。そうドーハとドバイ間の飛行機はファーストクラスになっている。ここのラウンジの広さ、豪華さに圧倒された。レストランは当然として、子供を遊ばせるプレイルーム、祈りの部屋、ネットが整えられた個人ブース、免税店、そしてSPA！と想像を超える内容だ。朝5時代の静寂なラウンジで時を過ごすことができたことに大きな満足感がある。できればSPAに入ってみたかった。これまた、次回もあって欲しい機会に託すことにする。簡単に2回目の朝食を済ませ、ラウンジソファーに身を沈めていると、すかさず何かご用はありますか？と来る。

まだゆるりと過ごしたい気持ちを押し留め7時発ドバイ行きの飛行機に向かうことにした。ドーハからドバイは一時間半程、ファーストクラスと言っているが、ビジネスクラスと同じ、短時間の飛行で機材も小さいから、成田ドーハ間を飛んだ飛行機のビジネスクラスとは全く異なる。飛行は短くてもカタールからアラブ首長国連邦にと国をまたいで飛ぶからか食事もう意されている。まずは小さなカップにアラビックコーヒー、葉草茶みたいな苦い飲み物のサービスがあった。そして、この日三度めの朝食をとることになった。ワンプレートの食事にホッとした。何とか食べ終え、ふと外に目をやると砂漠の中に都市が築かれているドバイの地が迫っていた。

成田から15時間かかってようやく到着。回りに見える飛行機はどれもエミレーツ、日本では見ることがほぼない二階建ての大型機が並んでいた。到着ロビーに向かうも巨大な飛行場内に鉄道が走り、まずはそれに乗って入国審査に向かう。その前に現地旅行者の人が待っていてくれたことに驚いた。普通は入国手続きを終え、スーツケースを持って出てきたところで名前を掲げたプラカードを持って待っているのが普通だ。何故か？ま、そんなことはど



うでもよし。両替済ませ、街中には売っていないお酒として、ワインを買い求め、空港を後にした。ここで三連泊はJWマリオットマーキンス、高さ355m72階建てナツメヤシをイメージした外観の世界一の高層ホテルの39階の部屋に収まった。床から天井まで上に傾いているガラスなので、真下を望むことができる。ホテルの周囲は工事だらけ、周囲にはオフィスビル、目を少し先にやれば世界一高い超高層ビルのブルジュカリファの尖塔が光輝いている姿が見える。



幸いアーリーチェックインができ、部屋に荷物を置き、早速に街に出ることにした。世界一美しいスターバックスのあるイブン・バトゥータ・モールに行くということになった。ホテルそばに駅のあるドバイメトロに乗って行くことにした。地下鉄ではなく高架線路である。ビジネス・ベイ駅に着いたものの、切符の買い方が分からない。発券モニターの前で悩んでいると突然現れた黒の民族衣装をまとったおばちゃんが、手伝ってくれて、無事に目的地までの往復切符を入手できた。5分ごとにメトロが出ている。30分近く乗ることになったが、料金は3ディルハム日本円で90円、後日タクシーにも乗ったが、こちらも安い。何しろ外が酷暑の時期が多いドバイでは歩くことが自殺行為に成りかねないから、公共交通費が安いのかな。沿線から見える風景はグレイだ。緑は人工的に作り、育てないと無い。人間が造った以外は全て砂漠。

車のディーラーも目にする。トヨタ、ホンダは当たり前にして、ありましたねえ。ランボルギーニにベントレイ。ベンツ、レクサス、BMWを目にすることが多い、タクシーは殆どトヨタである。

目的地のイブン・バクトゥータモールは駅のすぐ前にあった。インド、ペルシャ、イスラム等デザインが異なるゾーンがある。店に入ることなく歩いていくと、ありました！スターバックス。モスクを模したモザイクタイルの高い天井に圧倒される。飲み物のお値段は日本並みだった。モール内をひととおり歩いた後はホテルに戻り、ダウ船ディナークルーズに備えた。

19:50に迎えに来るとバウチャーには書かれているにも関わらず40分ほど前に到着、急かされた。でも他のホテルにも寄ってピックアップしていくから、各ホテルで待たされクリークのダウ船乗り場に向かった。早い乗船とはなったが、出発は21時、料理もそれまではオアズケだった。他にもその手の船がたくさんあり、ドバイ観光の目玉になっていることに気づかされた。時はクリスマスイブ、サンタに扮装した乗組員がアラビックコーヒーと甘いデザートのお菓子で歓迎してくれる。基本アルコール無しの国だから、シャンパンがウェルカムカムドリンクで出てくることはない。(つづく)